ナチス怪獣大決戦 サメ人間対バラ人間

文:名無しの東北県人
イラスト:Blue_Gk/sigama/sage・ジョー

ウツテンカイ

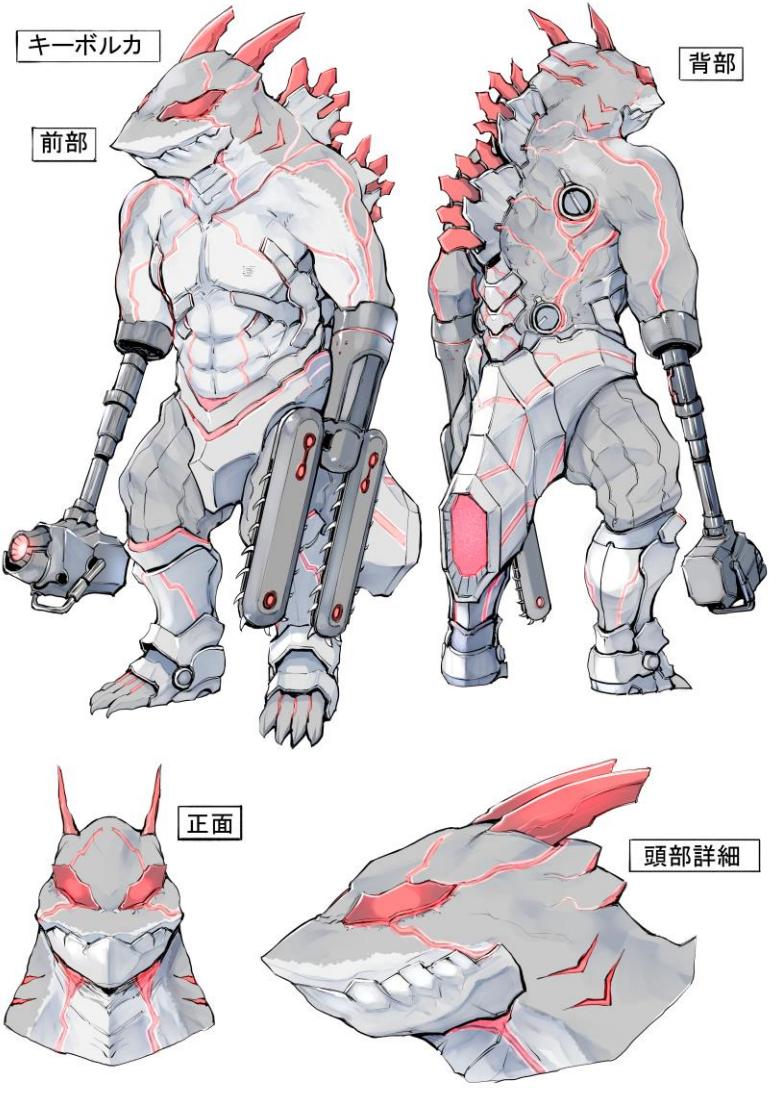
登場人物
&
クリーチャー
&
メカニック

ソフィア・マリューコヴァ　―　キャラクターデザイン

アノニマ　　ー　キャラクターデザイン

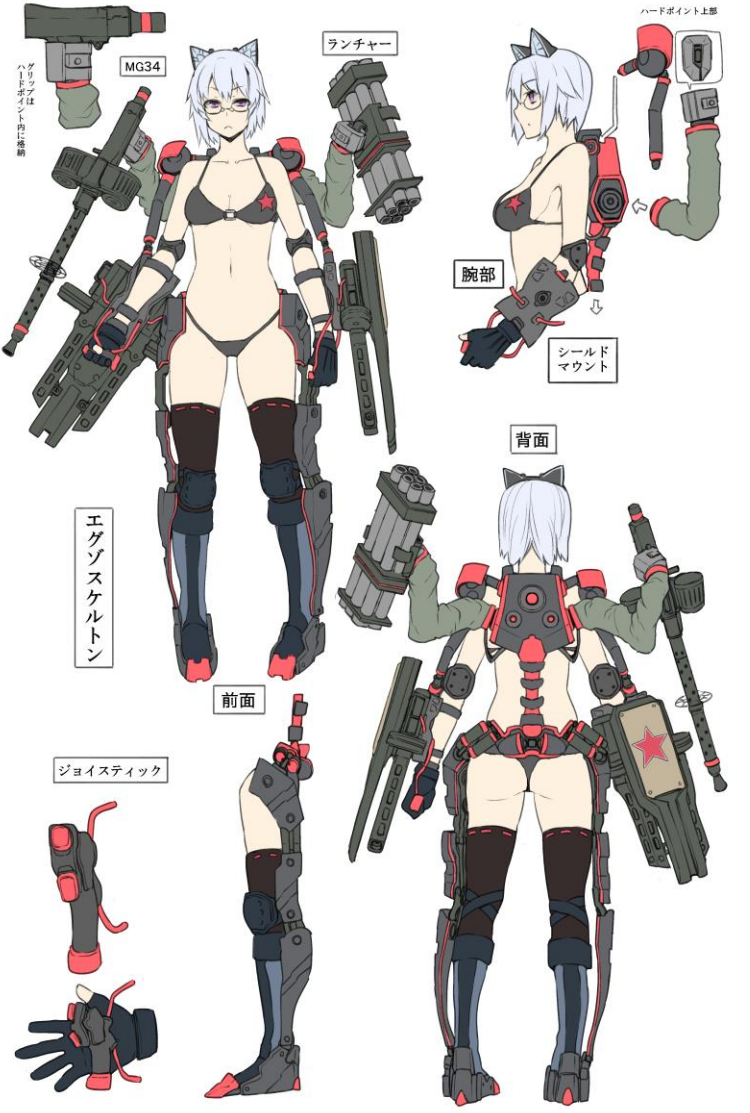
イルザ・ヴァレンシュタイン ― キャラクターデザイン

サメ人間
前
後
面
閉
開
オロロ
ロロロロ


キーボルカ
前部
背部
正面
頭部詳細

プロトサメ人間
前
後
ポーズ
顔

横
背面
鋸人間
前面
鋸


ハードポイント上部
ランチャー
MG34
グリップは
ハードポイント内に格納
腕部
シールド
マウント
背面
エグゾスケルトン
前面
ジョイスティック

ナチス怪獣大決戦 サメ人間対バラ人間

一九四五年、夏。
生き残ったアドルフ・ヒトラーは六人――。
最後の総統を決めるべく、戦いは続いていた。

■

一九四五年八月九日。
「戦わなければ総統（いきのこ）れない！」
ブラジル製電動ファシスト自転車に跨ってセーケシュフェヘールバール（ハンガリー中西部の都市）近郊を突き進んでいた仮面フューラーゲルマンズの一人は、ソ連軍部隊を発見するなりそう叫んだ。

「平民！」
すると彼や彼の仲間達――どちらも二十代の第三帝国総統と全く同じ顔をしたジェネリック（クローン）・アドルフ（総統）――は各々よく振った胡椒瓶を牛革ベルトに差し込み、全身を金属的に変質させたゲルマン細胞（緑や赤の装甲服）で覆い尽くす。
「全体主義がトップギアだぜ！」
まず一人のフューラーがバラトン湖から二十四キロの地点を往く車列の進路を塞ぐようにしてその前に躍り出ると、電動ファシスト自転車に驚いた先頭車両は慌てて停止、キーボルク大隊に所属するＴ‐34中戦車やＺＳＵ‐37自走対空砲は無残な玉突き事故を起こしてしまう。
「応戦しろ！」
ロシア語でサイボーグの名を持つソ連軍部隊に身を置く日系アメリカ人傭兵のイチカ・アベは仲間諸共後ろ半分がＭ３ハーフトラックに踏み潰された車両から這い出すなり叫ぶが、後続のフューラー達による継続攻撃で反対側からの脱出を

図ったコハルと共に爆発に包まれた。

「ゲーンとベアも殺られたぞ！」

「畜生！　ナチの新兵器か！」

外国人傭兵達は手持ちのあらゆる小火器で応戦したが、彼らに強烈な第一撃を加えた側は装甲服で殺到する死を弾きながら、横転したり煙を立ち昇らせている軍用車両のドアを一台一台引き剥がしていく。

「ソフィアを探せ！」

アマガエルめいた緑の装甲服を纏うフューラー、仮面フューラーゲルマンズのリーダーであるツヴァイ（総統二号）は太い長砲身をだらしなく垂らしたＪＳＵ‐152自走砲のハッチを無理矢理こじ開けつつ言う。

彼らが今ここにいる理由はただ一つ。キーボルク大隊の首領たるスペクター（注1）、ソフィア・マリューコヴァ少佐が前線視察のためセーケシュフェヘールバールを訪れるという情報を得たためだ。

『豚ハ死ネ』

しかしソフィアのものらしいリムジンの後部ドアを開けた総統四号（フィーア）が見たのは艶やかな黒髪と紅瞳を持つ女傑ではなく、チューブが多数繋がるガスマスクから奇怪な電子音声を響かせる殺人機械だった。

刹那、胸にペンキで荒っぽく赤い星を描かれている鹵獲鋸人間は左側二本しか残っていないチェーンソーで黄色の装甲服を纏う総統四号を両断する。

「デュテリオスを出せ！」

仲間が湿った不快音響を立てて左右に分かたれるなり、ツヴァイは天を向いた赤黒い断面から湯気が立ち昇る前に叫ぶ。

「ナチス人間砲弾、斉射始め！」

装甲服備え付けの無線機から命令を受けると、やや離れた場所で待機していたマジックヒトラー号（総統母艦）は光学迷彩を解除、その上部に装備したナチス人間大砲から恐るべき『怪獣』を撃ち上げた。

『ミンナ死ネ。ドイツ人ヲ殺セ』

そして「ナチスじゃない！」をモットーとしている『ナチズムＺＺ』こと新機動国家社会主義超ドイツ労働者党（枢軸のオルフェンズ）の元尖兵が狭い視界に残りのフューラーを見付けるのと、そんな捕獲品の背後に身長二・五メートルの異形が降り立つのはほぼ同時。

『豚……ッ』

鹵獲鋸人間がゆっくりと振り向いたその先で、漂う煙と転がる残骸を背にしたサメ人間――濃い青と白の体を持つ、ナチス最強の怪獣――は、人がまだ猛獣に怯える小動物だった頃を思い出させるかの如し咆哮でコルダイト火薬臭い空気を激震させた。

サメの遺伝子を組み込んだ受精卵をフランスやオランダから強制連行してきた女性達の子宮に戻し、胎内である程度成長させてから無理矢理出産させるという方法で誕生したこの怪獣は、様々な軟骨魚綱（なんこつぎょこう）・板鰓亜綱（ばんさいあこう）が合体した姿をしている。

頭部は後ろに角が二本生えたホホジロザメのそれ。
張り出した先端に目と鼻腔が存在するシュモクザメ頭の右手。
左手はブレード状の長い吻(ふん)を持ったミツクリザメの頭。
尻尾の先にはヨシキリザメの尖った頭が二つ。
背中から伸びる四本の茶色い触手の先端部は揃って、古代ザメとして知られるラブカのグロテスクな頭部。
『砕ケ散ルマデ戦ウ』
瞬時にフューラー達など眼中になくなった鹵獲鋸人間は左腕二本を振り上げてサメ人間へ突進した！
「バラバラにしちまえ！」
以前不良将校と呼ばれたイタリア人傭兵のトニーやその部下マリナレスカ達は援護のため、車両の残骸裏から身を乗り出して各々の得物による至近距離猛射を敵怪獣に浴びせる。

しかし無数の九ミリ弾がざらついた表皮を貫くことは叶わず接触点から白煙を立ち昇らせるのみ、それどころか二人を見付けたサメ人間は猪口才なとばかりに長い尻尾を大きく振ると先端にあるヨシキリザメの頭部二つで脳天を同時粉砕、更に必殺のＰＩＡＴ（対戦車擲弾発射機）を今まさに叩き込まんとした別のルーマニア人傭兵（オカッチ）の腹部も左腕で串刺し刑に処した。

刺された大男が全身から血肉を散らしつつ放り投げられる一方、鹵獲鋸人間は引き続きチェーンソーを振り上げて肉薄、向き直ったサメ人間の胸部に右上から左下にかけての一撃を浴びせて苦悶させる。醜い傷口から迸る鮮血！

続いて高速回転するナチ・チタニウムの刃は逆袈裟に走り、サメ人間は口から大量の生臭い血飛沫（じんしやー）をぶちまけた。

だが人鮫の遺伝子比が三対七となっている怪獣は怯むことなく身を乗り出し、シュモクザメ頭で敵マシンの動力パイプに噛み付くなり躊躇なく右腕を振るって血管と被覆線を引き千切る。

そして飛び散った機械油が地面を汚すよりも早く――今度はミツクリザメ頭を突き出す。
吻が難燃繊維のロングコートで覆われている殺人機械の背中側から飛び出して歯車や金属部品をぶちまけるや否やサメ人間は左腕を大きく動かし傷口を広げ、それから相手に前蹴りを浴びせて後方へと吹き飛ばした。
『鮫ハ死――』
満身創痍になりながらも火花を散らしつつ立ち上がろうとした鹵獲鋸人間は、敵のホホジロザメ頭に亀裂が入り、その間から光が漏れ始めていることに気付く。
「頭部の展開を確認！　時間がないぞ時間が！」
傭兵達が叫ぶ間にサメ人間の頭部は四つに割れ、黒々としたウバザメの頭部を油臭い世界に露出させた。
「アーメン」
一人が観念した様子でそう言った半秒後、ウバザメ頭の大きく開かれた口から

体内の暗黒怨念寄生虫があたかも熱線か何かのように放出された。
凄まじき潮流をまともに浴びた鹵獲鋸人間は外装や骨組み全てを食い尽くされ全身を泡立たせた上で爆発四散するが、サメ人間は全く止まることなくそのまま自分を中心にした半円を描き、射線上に存在する全てを例外なく消滅させた。
「憎しみは酒場奥の泥酔漢」
勝利の咆哮を上げるサメ人間を見て仮面フューラーゲルマンズが安堵する一方、セーケシュフェヘールバールから四十四キロ南東……旧名シモントーニャにしてキーボルク大隊が家としている現・決戦機動要塞都市『メカソフィアシティ』の地下司令部で椅子に腰掛けつつ大型モニター越しに戦況を伺っていたソフィア・マリューコヴァの表情は晴れない。
「レルネーの大蛇そっくりに、内で新たな渇きを生み続ける」
サメ人間が袋をひっくり返す要領で胃を外に出し、未消化物を吐き捨てた上で空になった小汚いそれを体内に戻す様子を双眸に映しながら、改造したソ連軍の

将校用制服から浮いた腹筋を露出させている人物は足を組み直す。
「憐れむべき運命を与えられた憎しみは、決して机の下で眠ることはできない」
血で血を洗うナチス怪獣戦争の主役が美貌を曇らせている理由は多くの部下が死んだことでも、キーボルク大隊が少なからぬ重装備を失ったことでもない。
ソフィアはただ、自分が男性器と精巣を持たぬ事実に絶望していた。

注1 ナチスに立ち向かう、一人につき一つの様々な特殊能力を持った少女達。

■

一九四五年八月十日。
怪獣王ヒトラーとメカスターリンによる怪獣大戦争（独ソ戦）はまだ続いていた。
今や東部戦線は完全なる泥沼と化し、結末の見えぬ状況の中、怪獣無法地帯と

変貌したハンガリー西部でもドイツ軍とソ連軍はバラトン湖の西と東にそれぞれ布陣しての終わりなき消耗戦を展開している。

誰だって殺してる。怪獣を殺してる。ＥＡＴ ＫＩＬＬ ＡＬＬ……。

「生き残っているのは……」

ツヴァイはドイツ軍制圧下にあるバラトンフェルド（バラトン湖西岸の都市）に――現在は『鮫林寺（しゃーりんじ）』と呼ばれる――建つ『げるまんスーパーアリーナ』（ドイツ軍司令部）の食堂で苦々しく呟く。

「五人だけか……」

顔つきも声も学生時代のアドルフ・ヒトラーと全く変わらない彼の周囲では、昨日セーケシュフェヘールバール近郊でソフィア・マリューコヴァを襲撃するも、当人を目視確認することさえできぬまま戻ってきた仮面フューラーゲルマンズが揃ってコーヒーカップと向き合っている。

今は固形化したゲルマン細胞（装甲服）ではなくドイツ国防軍用の制服に身を包んでいる彼らの容姿は、やはり若き日の第三帝国総統と何一つ違いがない。

総統ファイト。

十三人のジェネリック（クローン総統）・アドルフを極限状態に放り込み、最後まで生き残った一人を次期総統に据える計画のために彼らは産み出された。

「人類滅亡特急列車ん！」

突如床面より出現したワームホール（紫色の土管）から褐色肌の親衛隊女性将校が現れると、それぞれ「総統になって吸血鬼の大隊を作りたい」や「総統になって月の裏側に秘密基地を作りたい」と強く願っている者らは皆一様に表情を曇らせる。

「こちらが怪獣惑星への直通便となりますん！」

様々な意味を込めて『黒い人』とドイツ軍上層部から呼ばれているこのイルザ・ヴァレンシュタインは先端技術研究部隊を率いて非道極まる人体実験を繰り返し、サメ人間を始め、これまで数多くの軍事用生物や改造人間を世に送り出してきたマッドサイエンティストだ。

『人類の存亡に対する罪』

本人が不在のまま世界各国から死刑判決を下されている茶色のポニーテールと金色の瞳の所有者は同時に総統ファイトの責任者であり、今日に至るまで様々な無理難題を仮面フューラーゲルマンズに強いてきた輩でもある。彼女の姿を見た量産型ヒトラー達が露骨に表情を曇らせたのもそのせいだ。

「鼓膜を食い縛りん！」

ソフィア・マリューコヴァを殺すよう仮面フューラーゲルマンズに命じたのも、勿論この中尉である。

「総統は相当お怒りですん！」

イルザが腰に両手を当てて頬を膨らませると、彼女と共に先程食堂内に現れたプロトサメ人間は――イルザの優秀なる側近兼愛人――『三日以外にソフィアを殺せないと絞首刑かもだぜ』とゲルマン体の日本語で筆書きされたプラカードを掲げる。

「そんな無茶ですよ！」

立ち上がった総統十一号（エルフ）は、左の上腕部にハーケンクロイツなしの赤い腕章を付けている試作個体と黒き軍服を纏うイルザを相次いで睨む。

「奴はメカソフィアシティにいる！」

総統十一号が酷く声を震わせたこの決戦機動要塞都市はバラトン湖の東岸から南東に三十六キロ、ザルビッツ運河とシオ運河の合流ポイントに存在しており、対空機関砲・高射砲・地対空ミサイルから成る三段重ねの防空コンプレックスや対爆コンクリート防壁で完全に守られていた。

「メカソフィアシティですよ！　メカソフィアシティなんです！」

更に内部にはウラル山脈から疎開してきた軍事工場や各種施設が多数集められ、完全なる諸々の自給自足を高レベルで実現している。

ドイツ軍は今まで何十回もメカソフィアシティへの総攻撃を敢行していたが、その度に大損害を被って尽く撃退されていた。

「勝てる訳がない……」

しかし総統十一号が真に恐怖していたのは決戦機動要塞都市やそこに駐留する傭兵部隊ではなく、それらを統べるスペクターであった。
『規律を守れない者は出て行け』
メカソフィアシティ各地に血文字でこう記したソフィアはスペクターとしての特殊能力を何も持たぬ一方、他の追従を絶対許さないバイタリティと執念だけで事実上の国家運営や独自勢力としての生存圏確立、更に経済基盤の安定化までも成し遂げた精神的超人なのだ。
自分の小便を飲んで乾きに耐えた。
飢えを凌ぐため、死体の頭を泣きながら切り開けて中の脳味噌を貪り食った。
ソフィアが生きるために越えてはならぬ一線を越えた話は枚挙に暇がない。
「勝てる訳が……！」
総統十一号が弱々しい響きを漏らすのと、心底不愉快そうに眉間に皺を寄せたイルザを見て「いけない」とツヴァイが思わず口走るのは同時。

「――ッ」
直後、今度は天井に突如現れたワームホールから『サメ人間映画化決定！』の看板が勢い良く吐き出され、やや遅れて上を向いた総統十一号を下敷きにした。
「お前……っ！」
「皆さんが戦わないのは勝手ですん」
イルザは今やツヴァイを含むジェネリック・アドルフ全員が立ち上がっている仮面フューラーゲルマンズの前で呆れ声を発し、
「でもその場合、誰が総統になると思いますん？」
続いて大重量物の下敷きになり、血や薄桃色の臓物を体中から四散させている真新しい死体を一瞥した。
「総統ですん」
最後にプロトサメ人間が『お前らがやるしかないかもだぜ！』とプラカードを書き変えて所謂総統構文は完成する。

フューラー達に拒否権はない。戦うしかないのだ。戦え！
戦わなければ総統（いきのこ）れない！

■

一九四五年八月十一日。
「火星にぃ……っ！　火星に農場ができちゃうぅぅぅぅうっ！」
六時間程前、同性同士ながら『装具帯の恋』で結ばれている部下のスペクター（アノニマ）にこのような嬌声を上げさせたソフィア・マリューコヴァは今、午前九時を回ったメカソフィアシティの地下格納庫にいる。
「これが私達の子供なのね……」
低い柵の上に両肘を乗せているソフィアの前には、真新しいサイボーグ怪獣が全身にケーブルを繋がれた状態で駐機している。

キーボルカ。

メカソフィアシティが撃破したサメ人間を回収後再生した生体ロボットであり、右手前腕部にジェットハンマー、左手の同部には鋸人間の残骸から引き剥がした二連チェーンソーを装備。銀と白基調に変更された体にはナノメタルの赤が走り、両目はやはり赤色をしたゴーグル状の義眼で覆われていた。更に下顎及び尻尾、下半身は全て機械化されている。

勿論ソ連軍の正式装備ではないが、メカソフィアシティは事実上の独立国家であるため――確かにソ連軍傘下ではあるが人員や装備は全て自前で調達しており、スタフカ（ソ連軍最高総司令部）も単に「敵ではない」という理由から、責任の対価として行動の自由を得ているソフィア達を消極的に認めていた――問題ない。

「横顔はソフィア様そっくりです」

左胸に赤い星を描いた黒のマイクロビキニを纏う、銀髪と端正な顔の持ち主がソフィアのすぐ右横で微笑む。

「お腹には貴方の面影があるんじゃない？」
ソフィアの言葉に「確かに」と返した眼鏡の者こそアノニマである。
所謂猫耳めいた飾りを頭に付けている、この引き締まった肉体のスペクターはナチスの原爆工場破壊作戦やチェルカッスィ包囲戦における奮闘ぶりだけでなく、エグゾスケルトン（強化外骨格）を纏って全ての敵からソフィアを守り続けてきた存在としても認知されている。
「でも、ソフィア様……」
「言わない約束よ」
正気に戻ったかのようなアノニマの言葉をソフィアは遮る。
キーボルカ誕生の理由は税金対策と公式発表されているが、実際はどこまでも歪み切ったソフィアの代償行為に過ぎない。
「人生における最大の悲劇は二つあるの。一つは、欲しいものが手に入ること。もう一つは、欲しいものが手に入らないこと」

こう話すソフィアが何よりも渇望するのはアノニマとの間に子を成すことだが、それが絶対に実現不可能であると重々承知もしている彼女は理想と現実の狭間でかつて発狂寸前まで追い込まれた。

『自我に目覚めたロボットが巨大化するように、女同士で子供を作れないのなら女同士で怪獣を作ればいい』

ほとんど正気を失いかけていたソフィアはそう考えることで境界線ギリギリに踏み留まり――本人は踏み留まったと思っている――今に至る。

「時にソフィア様、これをご覧ください」

それに対して色々と思うところがない訳ではないアノニマではあるが、彼女は『考えるだけで気が狂いそうになることは考えないで済ます』という人間特有の素晴らしい機能を今回も生かした上で一枚の写真を上官に差し出す。

「今朝、バラトン湖に派遣した調査隊が撮影したものです」

「へぇ……」

無言でアノニマから写真を受け取ったソフィアは、白黒世界の湖畔に横たわる息絶えた巨大ガメを見て眉間に皺を寄せる。

「気持ちのいいニュースじゃないわね」

ドイツ軍がバラトン湖に破棄した怪獣の死体を食って超大型化したカメ自体は珍しくないが、問題は長靴と一体化したゴム製の水深用作業服を着た調査隊員と共に写る潜頸亜目の左首筋に深い傷が走っていることだった。

「状況はDの活動が物理的以外の化学、地質、気象、精神等如何なる点でも一つ確認された際の第一種警戒態勢から、Dの活動が声、動き等物理的に確認された場合の第二種警戒態勢に移行しているものと私は考えます」

今アノニマが口にした『D』とは勿論、サメ人間のことである。実際のところサメ人間とは後付けの俗称であり、デュテリオスこそが最強怪獣の正式名だった。

「シティの防衛を強化しましょう。偵察機の数も三倍に」

写真を返された部下から小さい頷きを受け取ったソフィアは、具体的な指示を

幾つか出してから「怪物花（マンモスフラワー）は元気？」と問う。
メカソフィアシティの絶対的支配者たる首長が口にしたそれは、サメ人間とも鋸人間ともキーボルカとも異なる存在。
ソフィアとアノニマの、もう一人（もう一匹の怪獣）の子供の名前だった。

■

それから一時間後。
ドナウ川にて警戒任務中の小型哨戒艇バラシェーボ号と、それを任されている傭兵クリーンウォーターからの通信が「怖い怖いぜ……やっぱりうぁぁぁ！」を最後に途絶えた時、ソフィアは自分が裏を掻かれたことを察した。
「デュテリオス、ブダペスト近郊に出現！」
少しして女性オペレーターが声を上ずらせた直後、ソフィアやアノニマがいる

メカソフィアシティの地下司令部の大型モニターにドナウ川を突き進む背ビレが映し出される。
状況は『Dが出現した場合』の第三種警戒態勢から、今や『Dがハンガリーの特定地域に侵入することが確実とされた場合』の第四種警戒態勢に移行した。
「地上部隊をブダペストへ！」
「無駄よ。間に合わないわ」
「そんなことはわかってますよ！　でもやるしかないでしょう！」
興奮気味の部下に「まずは貴方が落ち着きなさい」とコーヒーカップをそっと差し出したソフィアは、肩越しに背後のアノニマを見る。
「どれだけ馬鹿な犬でも、主人が溺れているのを見れば『行け』と言われずとも川に飛び込むもの。ただの犬（正規軍）よりは動けるところを見せなくては」
視線を向けられた側は出口に向かって歩き出し、
「選択肢は二つあります。一つ目はここで待つこと」

数歩進んでから立ち止まると、敬愛する上官を自らも肩越しに見た。
「二つ目は単身ブダペストに赴いて、とんでもない馬鹿をすることです」

■

午前十時半。
所有者がソ連側に変わった二月の包囲戦の爪痕がまだ残るハンガリーの首都は、予期せぬ来訪者によって癒えぬ傷を更に深く抉られていた。
人々が『ドナウの真珠』と呼んで親しんだブダペストの中心は瓦礫の山と化し、今やあちこちでどす黒い炎が暴れ回っている。
「我々の命もどうなるか。炎はますます近付いて参りました」
退路を失いながらも焼け残ったビル内で放送を続けるアナウンサーの視界には、窓越し反対側の建物屋上によじ登って咆哮する怪獣――サメ人間の姿があった。

「いよいよ最後です。こちらに頭を向けました。物凄い恐怖です！」
アナウンサー達を見付けたサメ人間は今日何度目かわからぬ頭部展開を行い、ウバザメ頭からの暗黒怨念寄生虫で「皆さんさようなら！　さようならっ！」と絶叫する者達をフロアごと消滅させてしまう。
「みんな逃げろ！　早く！」
怪物とその統率者が支配する世界の頂点が喉を鳴らしながら斜め下方を睨むと、そこでは霊長の座から蹴り落とされた者達が逃げ惑っていた。
建物上から飛び降りたサメ人間は落下中に触手を体内に収納、更に両手両足をヒレに即時変化させて勢い良く地中に潜り込むと、超高速振動で粉砕した土中を『泳いで』突き進む。
「シェルターに行くんだ！」
赤く燃え盛る市街地でソ連兵と共に避難誘導を行っているカラーシ――普段はオーセンティックなバーを切り盛りしている――はふと、舗装を破壊して自分に

近付いてくる二等辺三角形に気付く。
サメだ！
あ　れ　は　サ　メ　だ　！
サ　　メ　　が　　来　　る　　の　　だ　　！
コンクリートの裂け目から青白ツートンの頭を出したサメ人間はタペータムと呼ばれる特殊な反射膜を有する瞳に獲物を捉えると急増速、距離を詰め切るなり飛び上がってハンガリー人男性の上半身を丸々食い千切り、そのまま両腹ビレを再び足に変形させ着地！
奴がこっちを向いてる。
整備兵であるにも関わらず市民をシェルターに誘導していたキーボルク大隊のアメリカ人傭兵、タッパーは突き付けられた絶望的事実に背筋を凍らせる。
例によって身長二・五メートルの獣は休暇を利用してブダペストを訪れていたタッパーが駆け出す前に開いた頭部内のウバザメ頭から暗黒怨念寄生虫を放射、

まだ残る建物を熱せられたバター宜しく次々に薙ぎ払い、降り注ぐ大量の瓦礫で彼を含む多数を死に追いやる。

「崩れるぞ！　逃げろ！　みんな逃げろーッ！」

別の場所では衰えぬ暗黒流で一撫でされた高い時計塔がゆっくりと崩れ落ち、舗装との激突で大音響を轟かせるや否や凄まじき土煙を空高く舞い上げた。

「これで国家予算はゼロだな。この国に来年があるかは知らんが」

二機の輸送用ヘリ（Fa223）にリフトワイヤーで吊下（ちょうか）されているエグゾスケルトン装備のアノニマは、今や汚く食い散らかされたショートケーキ宜しく『ある筈の建物がどこにもない』地獄を眼鏡越しに視認する。

「一体どうなるんだ……？」

ロシア語で「起動・共鳴・氷砕！」と叫んだ匿名の女性形（アノニマ）がリフトワイヤーを解除してサメ人間の前に降り立つ様子は、ブダペストから南五十キロに位置するメカソフィアシティの地下司令部にも中継されていた。

「勝った方が私達の所に来るだけよ」
不安を口にする部下に事実を返したソフィアは腕を組みつつ、大型モニターに眼差しを送る。今まさに決闘が始まろうとしていた。
「私達は祖国や東欧で、自由に対する挑戦や見境なき残虐行為と戦ってきた！」
赤と黒の装備を纏うスペクターは高速ホバー移動で前進しつつ右手を前に出し、左手側同様縦二連に装備されたＰＰＳｈ‐41短機関銃とバックユニットの右側にマウントされているＭＧ34軽機関銃を猛連射する。
スペクターとしてのアノニマの特殊能力は、ロンメルのＤＡＫが北アフリカで発見したエネルギー・コア――エグゾスケルトンの動力源だ――なる結晶体との高い親和性だった。
「私達は戦闘行為に尽力し、人類社会に安定を取り戻すために戦っている！」
続いてアノニマが左ジョイスティックの上部ボタンを親指で押すと閃光と共にバックユニット左部の六連装ランチャーからロケット弾が放たれ、大量の銃弾を

シュモクザメ頭で防御していたサメ人間に殺到する。すぐに近接信管が作動し、ナチス最強の怪獣は立て続けの爆発に包まれた。
「だがその努力と自己犠牲が評価されることはなく、仮に評価されたとしても、条件付きで渋々認められるに過ぎない！」
敵に触れる距離まで近付いたアノニマは爆炎が流れる前に右超信地旋回からの足払いを仕掛けてその体勢を崩すも決定打には至らず、逆に再び正対するなり、シュモクザメ頭の薙ぎ払いで六連装ランチャーをもぎ取られてしまう。
「ナチスとの戦いが泥沼化する中！」
鈍い音を立てて六本筒が転がる直前にアノニマは黒いパッドで覆われた右膝を突き上げ、サメ人間の下腹部に強烈な一撃を浴びせる。
「世界各地でドイツ軍に立ち向かう少女達が現れ始めた！」
続いて苦痛で巨体を捩らせた相手の頭部を防御だけでなく接近戦武器としても使用できる左右シールドの先端部で何度も殴打、

「それは人々から亡霊（スペクター）と呼ばれている！」
次に七十五連サドルマガジンを全て使い切ったＭＧ３４軽機関銃の銃身を右手で掴んでから基部をリモート爆砕、重量十二キロの機関部による痛撃をサメ人間の横っ面へ叩き込む！
「憎しみは酒場奥の泥酔漢」
捻じ曲がった分隊支援火器を捨てたアノニマは気付かないうちに敵左腕の吻が近くを掠めたことで右目上の髪の付け根が切れ、まるで血の涙のような赤い筋を顔に走らせている状態で右腕部以外の全武装を切り離す。
「レルネーの大蛇そっくりに、内で新たな渇きを生み続ける」
真鍮製の空薬莢が到底数え切れない程に転がる舗装上にアームや左シールドが相次いで落下し眩い火花を散らした。
「憐れむべき運命を与えられた憎しみは、決して机の下で眠ることはできない！」
ボードレールの『憎しみの樽』を口にしたアノニマは飛翔、サメ人間の背後に

降り立つと即振り向いて攻撃し、今度は鼻っ柱に七・六二ミリ弾を見舞う。
「行けッ！」
メカソフィアシティの地下司令部でソフィアが力強く一歩踏み出すのと同時にアノニマは思わず顔を背けてしまったサメ人間にまたもや高速ホバー移動で肉薄、右腕部の武装も捨てると右ショルダータックル、左右のフック連打、左回転蹴り、右ストレート、左フック、頭を両手で掴んでの頭突きを連続で叩き込む。
「やっぱりマグロをあげないと駄目ですん！」
ブダペストから遠く離れた『げるまんスーパーアリーナ』の自室バスルームでプロトサメ人間と仲良く入浴していたイルザは防水モニターに目に見えて動きが悪くなり始めたサメ人間の様子が映るとバスタブ内で立ち上がり、どういう訳か筋肉質な肢体から滴を飛ばす。
急にサメ人間が弱体化したもの無理はない。
小学生でも知っている通り、サメ人間の能力を十分に引き出すには一日あたり

二万匹の青森・大間産クロマグロがどうしても必要なのだ……！

「ヘドロに沈め！」

アノニマは強い空腹を満たすべく背を向けたサメ人間の尻尾を掴むとその場で高速超信地旋回を敢行し、プロレスで用いられるジャイアントスイングの要領でとにかく回しに回してから思い切り放り投げた。

狙いは当然鮫林寺（しゃりんじ）。

イルザに送り返したのである！

■

「滅びの前日、人類は何を見たかん！」

尿と糞の耐え難き悪臭漂うブダペストの地下水道で痛む体を休ませていた総統九号（ノイン）は、誰よりも聞きたくない輩の声で鼓膜を叩かれた。

「絶望の淵で、遂に我々は禁断の扉を開けるん！」
いつも通り美男子のプロトサメ人間を伴ってワームホールから現れたイルザ・ヴァレンシュタインは開口一番、両手を合わせて謝罪する。
イルザ曰く。
狂乱索餌（きょうらんさくじ）によってサメ人間を誘導するためブダペスト市街地へのマグロ血液の散布作業を総統九号に行わせたが、本当はメカソフィアシティに攻撃を仕掛けるつもりだったと。
イルザ曰く。
有り得ない手違いが発生してしまったのは「ピヨピヨピヨ」と鳴く巨大ヤゴが部屋に侵入してきたためで、お詫びとしてメカソフィアシティへの突入ルートを用意するので同地への攻撃を改めて行ってもらいたいと。
「ふざけるな！」
それを聞いた総統九号は大きく目を見開いて激昂する。

サメ人間によって多くのハンガリー人が生きたまま食われ、焼かれた。自分は良心の呵責に押し潰されそうになりながらも心を悪魔にしてブダペストにいると聞かされたソフィアを殺すべく任務を完遂し、正式名称デュテリオスが敗退後は命辛々追手を降り切ってここまで逃げてきたのだ。

それが手違いだったとはどういうことだ！

「大勢死んだ……大勢……」

様々な感情に襲われた総統九号は喉の奥から絞り出すかの如し声を発するが、彼の管理者は興味なさそうな様子でいつの間にやらポケットから取り出していた文庫本の七十七ページ目に涙していた。

「お前ェェェェェェッ！」

とうとう怒りを爆発させ、足下の石を拾い上げて踏み出した総統九号はすぐに停止する。即座に自分とイルザの中間に割り込んだプロトサメ人間の鋭い鰭撃（スラッシュ）で首を刎ね飛ばされたからだ。

「勝ったぞ」
文庫本の台詞を朗読するイルザの潤んだ瞳には、断面から血飛沫を噴き上げて崩れ落ちる迷彩服姿のジェネリック・アドルフは一切映っていない。
「俺達の……が……に勝ったんだ」
今この瞬間、彼女はイルザ・ヴァレンシュタインではなく文庫本の登場人物になっていた。

■

一九四五年八月十二日。
「火星にぃ……っ！　火星に農場ができちゃうぅぅぅぅうっ！」
サメ人間がワームホールで突如メカソフィアシティのすぐ前面に出現したのは、アノニマが上官（ソフィア）からブダペスト防衛の褒（情交）美を与えられた数時間後だった。

「火力を頭部に集中し即時撃破せよ！」

赤ペンキで『永遠に無理！』と落書きされている対爆コンクリート防壁の前に展開したキーボルク大隊のＴ‐34中戦車は雨が降り頻（しき）る中、大型サーチライトで顔を照らされたサメ人間に八十五ミリ戦車砲の集中砲火を浴びせる。

前日と違い、今回サメ人間は対人・対戦車用が悪辣に入り混じる複合地雷原で足を止められるなりカチューシャロケットと百五十二ミリ榴弾砲の凄まじき斉射、更に要塞都市内部からの艦砲射撃――大破したガングート級戦艦から取り外され、現在は旋回可能な状態でメカソフィアシティ内に配置されている二連装三十・五センチ主砲塔――まで加えられるが止まらず、逆に暗黒怨念寄生虫の薙ぎ払いで戦車隊に損耗率五割を与えた。

「人とカブトムシの喧嘩が繰り返されるだけか……」

地下司令部のアノニマ（大型モニター内）が眼鏡越しに薄紫の瞳を向けている先では、黒い背景に赤のワイヤーフレームで表示されたサメ人間が黄色同の友軍地上部隊や陣地を

次々に消滅させていた。
「ここにクワガタムシ君が加わっても何も変わらないわ」
腕組みをやめて彼女の横から歩み出たソフィアはオペレーターに耳打ちする。
それから十秒経たずして地下司令部同様、土中に隠されている秘密格納庫内で以前ソフィア達が鹵獲したＶ１飛行爆弾用カタパルトに巡航形態……うつ伏せで乗せられているキーボルカの全身から大量のケーブルが切り離された。
ジェットハンマーと鋸人間用の二連チェーンソーを装備したサイボーグ怪獣は磁気テープの信号を受信するなり赤い両義眼を一光りさせ、土煙を上げて開いた発進口から勢い良く射出される。
「キーボルカが貴方と同じ性能だと思ったら大間違いよ？」
ソフィアが大型モニター越しに見守る一方、サメ人間に不意打ちの体当たりを背後から浴びせて転倒させたキーボルカは着地後最初に首を、次に体そのものを左旋回させて宿敵に向き直る。

「三分で灰にしてあげるわ！」
後頭部や背ビレ二本に赤い特殊金属（ナノメタル）を露出させているキーボルカはソフィアが唾を飛ばすなり口を開けて金属的な咆哮を発し、サメ人間時代にはラブカ触手の付け根だった場所に穿たれている発射口からミサイルを放つ。
対怪獣誘導弾四発はまるで万華鏡のように一塊になって回転しつつサメ人間に急接近、着弾するなり爆発！
血肉をぶちまけたサメ人間に足裏及び尻尾先端部のスラスターを使い肉薄したキーボルカは高速回転する二連チェーンソーを振り下ろし、斬撃から間髪入れず、今度はジェットハンマーによる左頬への痛打を叩き込む。
大きく姿勢を崩したサメ人間は口内から血液だけでなく折れた歯も吐き出すがメカソフィアシティの最新兵器は止まらず、続いてジェットハンマーの先端部でデュテリオスを後退させると再び二連チェーンソーを掲げて突進した。
だが喧しい駆動音を響かせる回転鋸は盾としても使用できるシュモクザメ頭で

受け止められ、逆にサメ人間はミツクリザメ頭の吻でキーボルカの右胸を貫く。
背ビレ二枚目のすぐ横からオイルで汚れた青い先端部が火花を伴って飛び出し、一拍置いて金属部品が飛び散る！
されどキーボルカは猪口才なとばかりに体を貫かれたまま前方に体重をかけてサメ人間を押し倒し、馬乗り状態へ――頭部を叩き潰すべくジェットハンマーを振り上げるが、刹那にホホジロザメ頭のまま放たれた予想外の暗黒怨念寄生虫で右肘から先を綺麗に吹き飛ばされた。
ここがチャンスだと察したサメ人間は、未だ胴体を貫く吻のせいで一時離脱もできぬキーボルカの左首筋にシュモクザメ頭で噛み付いた。
「向こうも動けない！　着弾角度を深く取り、第二波攻撃を続行！」
サメ人間の肌に零れた熱いオイルが臭い煙を立ち昇らせるのと、地下司令部のソフィアが前のめりで叫ぶのはほぼ同時である。
キーボルカの発射口から再び撃ち出されたミサイル群は少し高度を取ってから

緩やかな縦半円を描いて一斉に急降下していく。
目まぐるしい展開の末、軍配はキーボルカに上がると思われた。
しかし横に回転して下の敵を迫るミサイル側に向けようとしたキーボルカから吻を引き抜いたサメ人間は、着弾直前のタイミングで手足をヒレに変化させると泳ぎの要領で体をくねらせ脱出してしまう。
そして「角度の問題じゃない！」とでも言わんばかりにミサイルは一匹寂しく残されたキーボルカに着弾、大爆発に包み込んで撃破してしまった。

■

「大丈夫よ」
金属音に気付いて振り向いたソフィアは、各々立ち上がって腰のホルスターに手を伸ばしているアノニマや女性オペレーター達を制止する。

「お前には注射より飲み薬の方が効きそうだからな」
地下司令部にいるメカソフィアシティの面々が揃って額に脂汗を浮かべる一方、侵入者――ツヴァイはソフィアにルガーＰ08拳銃を向けながら淡々と話す。
「終わりだ」
実際のところ、サメ人間によるメカソフィアシティの正面からの攻撃は単なる陽動に過ぎなかった。今や残り少ない仮面フューラーゲルマンズの本当の目的は、その隙に地下司令部に侵入してのソフィア殺害である。
「俺はお前を倒して総統になる。お前を殺しに来たんだ！」
ツヴァイは強い言葉を浴びせるが、言われた側は呆れ気味に自分のこめかみを人差し指でただ掻くのみ。
「総統っていうのはね、総統になろうとした時点で失格なのよ？」
ソフィアは大型モニター内で燃えるキーボルカに称賛の視線を送ってはいたが、侵入者に送られるロシア語には一切敬意が見受けられない。

「貴方、いきなりアウトって訳」
直後にソフィアが「ご飯よ」の一言を発した刹那、数本の太い触手が排気口を突き破って地下司令部に現れ、瞬く間にツヴァイの両腕を拘束して持ち上げる。
「なっ……何だ……ッ……！」
強烈な力で左右に引っ張られたことによる筋肉断裂の凄まじき大激痛を味わうジェネリック・アドルフの前で二人のスペクター（ソフィアとアノニマ）は手を繋ぐ。
「その子はバラ人間」
ソフィアが微笑んだ瞬間にツヴァイの肉体は左右に裂け、アノニマの「私達の可愛い子供だ」という締め括りと共に、その断面から臓物が出産の如く溢れ出た。

■

「んっ……？」

サメ人間の進撃によってメカソフィアシティの第一次防衛線が崩壊したため、生き残った少数のＴ‐34中戦車と共に雨中後退していたキーボルク大隊の傭兵は突然鼻腔を甘い香りで突かれた。

「おい、どうしたんだ？」

そこから少し離れた戦車壕でＭ１バズーカやＰＩＡＴ等を持った傭兵達と共に待機していたＳＵ‐85自走砲のイギリス人車長は上部ハッチから身を出すなり、何の前触れもなく吠え始めた軍用犬を心配する。

一体軍用犬が何に反応したのかはわからないが、異変が起きていることだけは車長にも理解できた。今はまだ夏であるにも関わらず、周囲の木々が全て紅葉に包まれていたからだ。あたかも、何者かによって養分を吸い取られたかの如く。

おぎゃあ。

そして、まるで赤ん坊のような……いや、赤ん坊の泣き声に限りなく近い音を前線にいる全員が耳にした。

それから一秒経たずして第二次防衛線の各地で大きな地鳴りと共に土が割れ、中から這い出したツタが猛り狂って手当たり次第の殺戮を開始する。

「この国は怪獣だらけか！」

惨殺されたのは足元から接近するツタを鉈で必死に切り払うも串刺しにされたイタリア人傭兵のマコッティや、四方八方に撃ちまくるも及ばなかったグリムとアンサイだけではない。

魚類の血でサメ人間を誘導すべく、密かに第二次防衛線付近まで移動していた仮面フューラーゲルマンズもまた同様だった。

ツタの横薙ぎを浴びた総統七号の上半身は錐揉み回転しつつ宙を舞い、右足を刎ねられた総統五号はそれでも這って逃げようとした瞬間に地割れに巻き込まれ、総統十号に至っては心臓への一刺しで絶命に追い込まれる。

「ソフィア・マリューコヴァこそ最大の怪獣って解釈はどうですん？」

バラトン湖西岸の『げるまんスーパーアリーナ』の自室でポップコーン片手に

メカソフィアシティからの中継映像を悦視（えっし）していたイルザは早口で捲し立てる。
「スターリングラードを生き抜いて、かつて雑魚だった彼女は知ってる筈ですん。怪獣を生み出す役割は本来総統のものですん」
力説するイルザのすぐ横ではプロトサメ人間が少し迷惑そうな表情で文庫本を読んでいるが、彼女は構わず話し続ける。
「でも時が閣下の力を弱めたん。関わって悪魔を生むにはこの地域のソフィア・マリューコヴァが相応しいん……！」
既に総統ファイトなど頭になくなったイルザが今から始まる怪獣プロレス（東欧SOS）への期待感で鼻血を流し始めた直後、メカソフィアシティの第二次防衛線に到達したサメ人間は自分の眼前に開いた大穴から出現した『怪物花（マンモスフラワー）』に行く手を阻まれた。
両肩部にウツボカズラめいた長い補虫筒を生やす上半身と根の下半身を持つ、濃い緑を基調とした全高約五メートルの超巨大植物怪獣は前者と後者の中間点に青いバラを咲き誇らせている。

バラ人間。
ソフィアが人類総植物化計画を密かに推し進めるも謀殺されたドイツ人科学者、ジークフリード・リーゼンドルフ博士の遺品を基に自分とアノニマ、更にバラの細胞を組み合わせて作り出した怪獣（子供）である。
肥料代わりにサメ人間の肉片を――以前キーボルク大隊によって殺害された、今ここにいるサメ人間とはまた別の個体――与えられて遺伝子を取り込んだが故、花弁の最奥から粘着質な音を立てて現れた赤き頭部はデュテリオスそっくりだ。
「殺して！」
言わば母親のソフィアから命令を受けたバラ人間は距離を詰めんとする敵怪獣目掛けて十数本に及ぶツタを繰り出すが、サメ人間は構わず前進し続けた。
だが迫るツタは予想外に多い数で、シュモクザメ頭で一本を噛み掴んだ瞬間に無防備となったサメ人間は右肩や厚い胸板を先鋭化した緑によって貫かれる。
鮮血を噴き上げ、苦痛で頭部を左右に揺らすサメ人間だったが心までは折れず

頭部を緊急展開、暗黒怨念寄生虫の第一撃で十数本のツタを一気に吹き飛ばし、続く第二撃によってバラ人間の胴体部を抉る。

サメ人間はここぞとばかりに攻撃を加えた。

赤黒い奔流の薙ぎ払いによってバラ人間の根が弾け飛び、右腕の触手も爆散、白煙を立ち昇らせて青い花弁が地面に何枚も剥がれ落ちていく。

だがバラ人間も負けじと喉の袋に溜めている溶解液を放射、防御のため咄嗟に頭を閉じたサメ人間に残るツタを全て巻き付けて強引に引き寄せる。

そしてツタで雁字搦めにされたサメ人間の眼前で隙間なく歯が生えている口を限界まで広げていく。赤く着色したコンドームのような皮膜は限界まで伸び切り、更に下顎も左右に展開した。丸呑みだ！

ホホジロザメ頭に前後から歯が食い込んで終局も間もなくかと思われたその時、サメ人間は自分に巻き付く緑の間から無理矢理ひり出したラブカ頭を「お前だけには絶対負けない」の意思表示としてバラ人間の両目に突っ込んだ。

両眼窩から熱い樹液を迸らせて悲痛な叫びを漏らすバラ人間に対し、拘束から逃れたサメ人間は頭部を開いて最大出力の暗黒怨念寄生虫を放つ。

なおも悶え苦しむ植物怪獣の口に直接撃ち込まれた攻撃は全てを食い尽くして後頭部から肉片と共に飛び出し、バラ人間に木っ端微塵の大爆発をもたらす。

だが……だが……それでは終わらなかった。

爆発によって飛び散った粒子は霧散して消えることなく再びバラ人間を形作り、それがさも当然であるかの如くおぎゃあと鳴いたのだ。

動揺隠せぬサメ人間は一旦閉じたホホジロザメ頭を慌てて再び開こうとするが、その前にバラ人間から怒涛の勢いで溶解液を浴びせられてしまう。

そして限界に達したサメ人間の肉体が溶けて頭から崩壊した直後にバラ人間は再度爆発、今度こそ完全に消滅した。

終

【スタッフ】

キャラクターデザイン／温泉万太郎様

クリーチャーデザイン・メカニックデザイン／ｓｉｇａｍａ様

バラ人間デザイン／すっとこ様

タイトルロゴデザイン・装丁関連／ナゴ様

ショップ特典クリアファイル用イラスト／でらうえあ様

会場限定特典ポストカード用イラスト／23様

スペシャルアドバイザー／たかなみ様

特別大使／人間食べ食べカエル様

プロモーション協力／共食いゾンビ様・たわけものサポーターズの皆様

推敲協力／れど様・ミクト・アタイ・ショクシャー・ワキスキー様・正太郎様・Ｍ‐鈴木様・ジェントル佐々木様

協賛／せっくすフレンズ様

【ナチス怪獣大決戦　サメ人間対バラ人間　製作費調達クラウドファンディング支援者の皆様】

あえうらで様／アダムスキー様／アンサイ・クロミヤ様／ゔぁるご様
ヴィー様／オガタガクオ様／オカッチ様／カラシ猫フ様／かわ様
キーリス様／きしてる様／くずまんじゅう様／ぐっち様／コハル様
さんます様／しあげかマン様／ジーク様(スタジオエルベ)／スキッパー様
スクービー様／すなっち様／たっぱ様(小狸堂)／たひろ様／ちゅーやん様
とーゆ様／トトばあー様／とみぞう様／ハンドルネームＨ様／フロッグ様
まきしま様／マナ・シャーク研究会様／まひる@アリス(サイン)様
マリナレスカ様／モクテン様／やらか堂本舗様／れど様／青み～様／芋様
海沢海綿様／大芝鉄蔵様／缶詰工場様／木島様／穀潰之熊様／始条明様
清水鉄平様／水蓮様／田村友則様／千裕様／原様／風流‐ＳＭＶ様
不良将校様／真琴屋悠雪様／町田一軒家様／水無月ほたる様／ＩＫＥ男様
ｉ＿ｎａ17様／ｋｕｒｏａｒｉ様／ｋｔｇｏｈａｎ様／Ｃｔａｊｉｎ様
@ｇｒｉｍ13様／その他十四名のパトロン様

『ナチス怪獣大決戦 サメ人間対バラ人間』
文:名無しの東北県人
イラスト:Blue_Gk/sigama/sage・ジョー
発行日:2019 年 7 月 27 日

発行:ウツテンカイ(thkjworks@gmail.com)
印刷:株式会社 緑陽社

※本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部/全部を無断で複製・再配布することを禁じます。

※この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、地名等とは一切関係ありません。

※また本作は『サメ人間 0』～『サメ人間 3』までの世界観をベースとした上で一部設定を変更、時系列もリセットの上再スタートした新シリーズ作品となります。